

## 我が合唱人生

川島正興

「合唱が好き」というとほとんどの場合「第九を歌うの？」と聞かれます。

私は第九も好きだし、何度も歌ったことがあります、何故なんだろうと思います。大学の合唱団では、当時日本のオペラ界の重鎮だった二期会の栗本正先生が指揮をなさっていました。私はこの先生から合唱の楽しさ、歌うことの喜びを教えていただきました。一番印象に残っているのは、三大学の演奏会で山で遭難した大学生の手記を下に清水修氏が作曲した「山に祈る」を合同演奏した時のことです。

演奏が進むうちに会場がシーンと水を打ったように静まり、やがて会場のあちこちから、すすり泣きの声が聞こえてきました。聴衆と合唱団員の息がぴったり合った瞬間でした。ナレーターの加藤道子さん（NHK）の朗読のすばらしさのおかげでもありましたが、この時「私たちにも人を感動させることができる」ことを知りました。

今はドイツのターフェル運動※に触発されて結成された東京リーダーターフェルという合唱団で歌っています。この合唱団はドイツ合唱連盟の海外合唱団にも登録されている83年の歴史を持つ合唱団です。ほぼ10年ごとに行われるドイツ合唱祭にも過去5回参加しており、私は、そのうち2回参加しました。合唱祭のあとドイツ各地を演奏旅行し、ドイツの合唱団の友人もたくさんできました。

2003年6月のドイツ合唱祭は、かつてヒットラーが演説したというベルリンのWaldbueheneの野外音楽堂で開催され、アジア代表として参加しました。

ライプツイッヒの演奏旅行では、かつてライプツイッヒノルト合唱団が来日したとき、我が家にホームステイしたユンケ氏（ライプツイッヒ大学の地質教授）のお宅に泊めていただきました。市の郊外の広い敷地のお宅でした。

20年前からは韓国男性合唱団とも交流をもち、今年6月にはソウルのオペラハウスでジョイントコンサートをしてきました。

また、リーダーターフェルの69歳以上が入団の条件となっているOB合唱団リーダーターフェル・ジルヴァーナでも歌っています。老人ホームでの慰問演奏、シルバーコンサート参加、東京駅の駅コン等を行っています。

「一度限りの人生だから自分のやりたいことをしたい」そう思って、仕事盛りの忙しいときも何とかやりくりして時間を作り今日まで続けてきました。カラオケでなく「合唱」なのは「仲間といっしょに音楽を作り上げる喜びがあるから」だと思います。これから死ぬまで歌い続けていきたいというのが私の願いです。

まさに「私の人生に合唱あり」です。

写真は国内での定期演奏会に宮地さんと参加した（後から2列目右から宮地さん、私です。歓迎会の一齣）時のものです。

※19世紀初頭ドイツでアマチュア男声合唱運動が興り、合唱祭、コンクールが盛んになった。